

監修

高木市之助
久松潛一
山岸德平
小島吉雄

新訂 萬葉集

二

佐伯梅友校註
藤森朋夫校註
石井庄司校註

監修

高木市之助
山岸德平

久松潛一
小島吉雄

新訂
萬
葉
集
二

佐伯梅友校註
藤森朋夫校註
石井庄司校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

佐伯梅友（さへきうめとも）

明治三十二年埼玉縣生。昭和三年京都大學國文學科卒業。東京教育大學名譽教授。大東文化大學教授。主著「萬葉語研究、源氏物語新抄、古今和歌集等。

藤森朋夫（ふちもりともを）

明治三十一年長野縣生。昭和四十四年歿。昭和四年東北大學國文學科卒業。東京女子大學教授を経て大東文化大學教授。主著「堤中納言物語新釋、萬葉集研究書誌、近代秀歌等。

石井庄司（いしゐしやうじ）

明治三十三年奈良縣生。昭和三年京都大學國文學科卒業。東京教育大學教授を経て東海大學教授。主著「國文學と國語教育、古典考究等。

日本古典全書

「訂 萬葉集」 二 佐伯梅友・藤森朋夫
石井庄司校註

昭和二十五年八月三十日初版發行

昭和四十八年三月二十日新訂初版發行

昭和五十一年三月二十日第三刷發行

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九州

市小倉北區砂津・名古屋市中區榮）

定價 九八〇圓

目次

本文

〔訓〕

卷第五	三
-----	---

雑歌	三
----	---

五三 太宰の帥大伴の卿の、凶問に報ふる歌一首

五四 筑前の守山上の臣憶良が挽歌一首短歌并せたり

六〇 山上の臣憶良が、惑へる情を反さしむる歌一首短歌并せたり

并せたり

六三 山上の臣憶良が、子等を思ふ歌一首短歌并せたり

八四 山上の臣憶良が、世間の住まり難きを哀しむる歌一首短歌并せたり

首短歌并せたり

目次

〔原文〕

卷第五	二七
-----	----

雑歌	二七
----	----

五三 太宰帥大伴卿報凶問歌一首

五四 筑前守山上臣憶良挽歌一首并短歌

六〇 山上臣憶良令反感情歌一首并短歌

六三 山上臣憶良思子等歌一首并短歌

八四 山上臣憶良哀世間難住歌一首并短歌

八〇六 太宰の帥大伴の卿の相聞の歌二首

八〇八 答ふる歌二首

八二〇 帥の大伴の卿の、梧桐の日本琴を中衛の大將藤原の

卿に贈る歌二首

八二三 中衛の大將藤原の卿の報ふる歌一首

八二三 山上の臣憶良が、鎮懷石を詠める歌一首短歌并せた

り

八二五 太宰の帥大伴の卿の宅の宴の梅花の歌三十二首序并

せたり

八二七 故郷を思ふ歌二首

八四九 後に追ひて和ふる梅花の歌四首

八五三 松浦の河に遊びて贈り答ふる歌二首

八五五 蓬客等の、更に贈れる歌三首

八五九 娘等の、更に報ふる歌三首

八六一 帥の大伴の卿の、追ひて和ふる歌三首

八〇六 太宰帥大伴卿相聞歌二首

八〇八 答歌二首

八二〇 帥大伴卿梧桐日本琴贈中衛大將藤原卿

歌二首

八二三 中衛大將藤原卿報歌一首

八二三 山上臣憶良詠鎮懷石歌一首并短歌

八二五 太宰帥大伴卿宅宴梅花歌三十二首并序

八二七 思故郷歌二首

八四九 後追和梅花歌四首

八五三 遊松浦河贈答歌二首

八五五 蓬客等更贈歌三首

八五九 娘等更報歌三首

八六一 帥大伴卿追和歌三首

八四 吉田の連宜が、梅花の歌に和ふる一首

八五 吉田の連宜が、松浦の仙媛の歌に和ふる一首

八六 吉田の連宜が、君を思ふこと未だ盡きず、重ねて題

せる二首

八六 山上の臣憶良が松浦の歌三首

八七 領巾麿の嶺を詠める歌一首

八七 後の人の、追ひて和ふる歌一首

八七 最後の人の、追ひて和ふる歌一首

八七 最後の人の、追ひて和ふる歌二首

八七 書殿にて 餞酒せし日の倭歌四首

八八 敢へて私の懷を布ぶる歌三首

八八 三島の王の、後に松浦佐容媛の歌に追ひて和ふる

一首

八八 大典麻田の連陽春が、大伴の君熊癡の爲に志を述べ

る歌二首

八四 吉田連宜和梅花歌一首

八五 吉田連宜和松浦仙媛歌一首

八六 吉田連宜思君未盡重題二首

八六 山上臣憶良松浦歌三首

八七 詠領巾麿嶺歌一首

八七 後人追和歌一首

八七 最後人追和歌一首

八七 最々後人追和歌二首

八七 書殿餞酒日倭歌四首

八八 敢布私懷歌三首

八八 三島王後追和松浦佐容媛歌一首

八八 大典麻田連陽春爲大伴君熊癡述志歌二
首

八六 山上の臣憶良が、熊擬の爲に志を述ぶる歌に和ふる

八六 山上臣憶良和爲熊擬述志歌六首并序

六首序并せたり

八三 貧窮問答の歌一首短歌并せたり

八三 貧窮問答歌一首并短歌

八四 山上の臣憶良が、好去好來の歌一首短歌并せたり

八四 山上臣憶良好去好來歌一首并短歌

山上の臣憶良が、病に沈みて自ら哀し^{かな}ぶる文一首

山上臣憶良沈痾自哀文一首

山上の臣憶良が、俗道の、假合は即ち離れて、去り

山上臣憶良悲歎俗道假合即離易去難留

易く留まり難きを悲しび歎く詩一首序并せたり

詩一首并序

八七 山上の臣憶良が、重き病に兒等を思ふ歌一首短歌并

八七 山上臣憶良重病思兒等歌一首并短歌

せたり

九四 男子名は古日に戀ふる歌一首短歌并せたり

九四 戀男子名古日歌一首并短歌

卷第六……………三

卷第六……………二五

雜歌……………三

雜歌……………二五

九七 養老七年癸亥の夏五月、芳野の離宮に幸し^{いさま}し時、笠^{かさ}

九七 養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時笠

の朝臣金村^{かなむら}が作れる歌一首短歌并せたり

朝臣金村作歌一首并短歌

九二〇 或本の歌三首

九二三 車持くるもの朝臣あそ千年が作れる歌一首短歌并せたり

九二五 或本の歌二首

九二七 神龜元年甲子の冬十月、紀伊の國に幸しし時、山部やまべの宿禰あかひと赤人が作れる歌一首短歌并せたり

九二〇 二年乙丑の夏五月、芳野の離宮に幸しし時、笠の朝

臣金村が作れる歌一首短歌并せたり

九二三 山部の宿禰赤人が作れる歌二首短歌并せたり

九二六 冬十月、難波の宮に幸しし時、笠の朝臣金村が作れ

る歌一首短歌并せたり

九二三 車持の朝臣千年が作れる歌一首短歌并せたり

九二三 山部の宿禰赤人が作れる歌一首短歌并せたり

九二五 三年丙寅の秋九月十五日、播磨の國いなみの印南野いんなんのに幸しし

時、笠の朝臣金村が作れる歌一首短歌并せたり

九二六 山部の宿禰赤人が作れる歌一首短歌并せたり

九二〇 或本哥三首

九二三 車持朝臣千年作歌一首并短歌

九二五 或本哥二首

九二七 神龜元年甲子冬十月幸于紀伊國時山部

宿禰赤人作歌一首并短歌

九二〇 二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣

金村作歌一首并短歌

九二三 山部宿禰赤人作歌二首并短歌

九二六 冬十月幸于難波宮時笠朝臣金村作歌一

首并短歌

九二三 車持朝臣千年作歌一首并短歌

九二三 山部宿禰赤人作歌一首并短歌

九二五 三年丙寅秋九月十五日幸于播磨國印南

野時笠朝臣金村作歌一首并短歌

九二六 山部宿禰赤人作歌一首并短歌

九四 辛荷の島を過ぎし時、山部の宿禰赤人が作れる歌一

九四 過辛荷島時山部宿禰赤人作歌一首并短

首短歌并せたり

歌

九五 敏馬の浦を過ぎし時、山部の宿禰赤人が作れる歌一

九五 過敏馬浦時山部宿禰赤人作歌一首并短

首短歌并せたり

歌

九六 四年丁卯の春正月、諸王諸臣子等に勅して、授刀寮

九六 四年丁卯春正月勅諸王諸臣子等散禁於

に散禁せしめられし時、作れる歌一首短歌并せたり

授刀寮時作歌一首并短歌

九七 五年戊辰、難波の宮に幸しし時、車持の朝臣千年が

九七 五年戊辰幸于難波宮時車持朝臣千年作

作れる歌四首

歌四首

九八 同じき幸の時、膳の王の作れる歌一首

九八 同幸之時膳王作歌一首

九九 太宰の少貳石川の朝臣足人が歌一首

九九 太宰少貳石川朝臣足人歌一首

一〇〇 帥の太伴の卿の和ふる歌一首

一〇〇 帥太伴卿和歌一首

一〇一 多十一月、太宰官人等、香椎の廟を拜み奉りし時、

一〇一 多十一月太宰官人等奉拜香椎廟時帥太

帥の太伴の卿の作れる歌一首

伴卿作歌一首

一〇二 大貳小野の朝臣老が作れる歌一首

一〇二 大貳小野朝臣老作歌一首

一〇三 豊前の守宇努の首男人が作れる歌一首

一〇三 豊前守宇努首男人作歌一首

六〇 帥の太伴卿の、遙に芳野の離宮を思ひて作れる歌一首

六一 同じき卿の、次田温泉に宿りて、鶴の喧くを聞きて

作れる歌一首

六二 天平二年庚午、勅して擢駿馬使太伴の道足の宿禰等

を遣しし時、勅使太伴の道足の宿禰を帥の家に饗せ

し日、葛井の連廣成聲に應じて吟へる歌一首

六三 冬十一月、太伴坂上の郎女、名兒山にて作れる歌一首

六四 同じき坂上の郎女の、京に向ふ海路に濱の貝を見て

作れる歌一首

六五 冬十二月、太宰の帥太伴の卿の京に上りし時、娘子

の作れる歌二首

六七 大納言太伴の卿の、即ち和ふる歌二首

六八 三年辛未、大納言太伴の卿の、寧樂の家に在りて故

郷を思ひて作れる歌二首

六〇 帥太伴卿遙思芳野離宮作歌一首

六一 同卿宿次田温泉時聞鶴喧作歌一首

六二 天平二年庚午勅遣擢駿馬使太伴道足宿

禰等時勅使太伴道足宿禰饗帥家日葛井

連廣成應聲吟歌一首

六三 冬十一月太伴坂上郎女名兒山作歌一首

六四 同坂上郎女向京海路見濱貝作歌一首

六五 冬十二月太宰帥太伴卿上京之時娘子作

歌二首

六七 大納言太伴卿即和歌二首

六八 三年辛未大納言太伴卿在寧樂家思故郷

作歌二首

七二 四年壬申、藤原の宇合の卿の、西海道節度使に遣されし時、高橋の連蟲麿が作れる歌一首短歌并せたり
七三 天皇、酒を節度使の卿等に賜へる御歌一首短歌并せたり

七五 中納言安倍の廣庭の卿の歌一首

七六 五年癸酉、草香山を超えし時、神社の忌寸老麿が作れる歌二首

七六 山上の臣憶良が沈痾の時の歌一首

七九 大伴坂上の郎女、姪大伴の宿禰家持に與ふる歌一首

八〇 安倍の朝臣蟲麿が月の歌一首

八一 大伴の坂上の郎女の月の歌三首

八四 豊前の國の娘子の月の歌一首

八五 湯原の王の月の歌二首

八七 藤原の朝臣八束が月の歌一首

八八 市原の王の、宴に父安貴の王を禱ぐ歌一首

七二 四年壬申藤原宇合卿遣西海道節度使時
高橋連蟲麿作歌一首并短歌
七三 天皇賜酒節度使卿等御歌一首并短歌

七五 中納言安倍廣庭卿歌一首

七六 五年癸酉超草香山時神社忌寸老麿作歌二首

七六 山上臣憶良沈痾之時歌一首

七九 大伴坂上郎女與姪大伴宿禰家持歌一首

八〇 安倍朝臣蟲麿月歌一首

八一 大伴坂上郎女月歌三首

八四 豊前國娘子月歌一首

八五 湯原王月歌二首

八七 藤原朝臣八束月歌一首

八八 市原王宴禱父安貴王歌一首

九六 湯原の王の打酒の歌一首

九六〇 紀の朝臣鹿人が松の樹の歌一首

九六一 同じき鹿人が泊瀬河の歌一首

九六二 大伴の坂上の郎女の、元興寺の里を詠める歌一首

九六三 同じき郎女の、初月の歌一首

九六四 大伴の宿禰家持が初月の歌一首

九六五 大伴の坂上の郎女の、親族と宴せる歌一首

九六六 六年甲戌、海犬養の宿禰岡麿が詔に應ふる歌一首

九六七 春三月、難波の宮に幸しし時の歌六首

九七〇 作者未だ詳ならざる歌一首

九七一 船の王の歌一首

九七二 守部の王の歌二首

一〇〇一 山部の宿禰赤人が歌一首

一〇〇二 安倍の朝臣豊繼が歌一首

一〇〇三 筑後の守葛井の連大成が、遙に海人の釣船を見て作

九六九 湯原王打酒歌一首

九七〇 紀朝臣鹿人松樹歌一首

九七一 同鹿人泊瀬河歌一首

九六二 大伴坂上郎女詠元興寺之里歌一首

九六三 同郎女初月歌一首

九六四 大伴宿禰家持初月歌一首

九六五 大伴坂上郎女宴親族歌一首

九六六 六年甲戌海犬養宿禰岡麿應詔歌一首

九六七 春三月幸于難波宮時歌六首

九七〇 作者未詳歌一首

九七一 船王歌一首

九七二 守部王歌二首

一〇〇一 山部宿禰赤人歌一首

一〇〇二 安倍朝臣豊繼歌一首

一〇〇三 筑後守葛井連大成遙見海人釣船作歌一

れる歌一首

首

一〇四 按作の村主益人が歌一首

一〇四 按作村主益人歌一首

一〇五 八年丙子の夏六月、芳野の離宮に幸しし時、山部の

一〇五 八年丙子夏六月幸于芳野離宮時山部宿

宿禰赤人が、詔に應ふる歌一首短歌并せたり

一〇五 禰赤人應詔歌一首并短歌

一〇七 市原の王の、獨子を悲しふる歌一首

一〇七 市原王悲獨子歌一首

一〇八 忌部の首黒鷹が、友人の餘く來るを恨むる歌一首

一〇八 忌部首黒鷹恨友人餘來歌一首

一〇九 冬十一月、葛城の王等に橋の姓を賜ひし時、御製

一〇九 冬十一月葛城王等賜橋姓之時御製歌一

の歌一首

首

一〇〇 橋の宿禰奈良鷹が、詔に應ふる歌一首

一〇〇 橋宿禰奈良鷹應詔歌一首

一〇二 冬十二月、葛井の連廣成が家に宴せる歌一首

一〇二 冬十二月葛井連廣成家宴歌一首

一〇三 九年丁丑の春正月、橋の少卿并せて諸大夫等、彈正の

一〇三 九年丁丑春正月橋少卿并諸大夫等宴彈

尹門部の王の宅に宴せる歌二首 門部の王、橋の文明

一〇三 正尹門部王宅歌二首 門部王橋文明

一〇五 榎井の王が、後に追ひて和ふる歌一首

一〇五 榎井王後追和歌一首

一〇六 春二月、諸大夫等の左少辨巨勢の朝臣宿禰鷹が家に

一〇六 春二月諸大夫等宴左少辨巨勢朝臣宿禰

宴せる歌一首

鷹家歌一首

一〇七 夏四月、大伴の坂上の郎女の、相坂山あさかやまを越ゆる時作れる歌一首

一〇八 十年戊寅、元興寺の僧の自ら嘆く歌一首

一〇九 石上いそのかみの乙磨おとまろの卿の、土佐の國に配せられし時の歌三首
短歌并せたり

一〇四 秋八月、右大臣橋の家に宴せる歌四首

一〇六 十一年己卯、天皇の高圓たかまとの野に遊獵し給ひし時、堵中に遁れ走れる小獸を獲て御在所に獻るに擬へて、大伴の坂上の郎女の作れる歌一首

一〇九 十二年庚辰の冬十月、太宰の少貳藤原の朝臣廣嗣ひろつぐ、反

を謀り軍を發せるに依りて、伊勢の國に幸しし時、河

口の行宮かりみやにて内舍人大伴の宿禰家持が作れる歌一首

一〇〇 天皇の御製の歌一首

一〇一 丹比たちひの眞人屋主まひとやぬしが歌一首

一〇三 狹殘ささぎの行宮にて、大伴の宿禰家持が作れる歌二首

一〇七 夏四月大伴坂上郎女越相坂山時作歌一首

一〇八 十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首

一〇九 石上乙磨卿配土左國時歌三首并短歌

一〇四 秋八月右大臣橋家宴歌四首

一〇六 十一年己卯天皇遊獵高圓野之時獲遁走堵中小獸擬獻御在所大伴坂上郎女作歌一首

一〇九 十二年庚辰冬十月依大宰少貳藤原朝臣

廣嗣謀反發軍幸于伊勢國之時河口行宮

内舍人大伴宿禰家持作歌一首

一〇〇 天皇御製歌一首

一〇一 丹比眞人屋主歌一首

一〇三 狹殘行宮大伴宿禰家持作歌二首

一〇四 美濃の國多藝の行宮にて、大伴の宿禰東人が作れる

歌一首

一〇五 大伴の宿禰家持が作れる歌一首

一〇六 不破の行宮にて、大伴の宿禰家持が作れる歌一首

一〇七 十五年癸未の秋八月、内舍人大伴の宿禰家持が、久邇

の京師を讀めて作れる歌一首

一〇八 高丘の連河内が歌一首

一〇九 安積の親王の、左少辨藤原の朝臣八束が家に宴せる

日、内舍人大伴の宿禰家持が作れる歌一首

一一〇 十六年甲申の春正月、諸卿大夫、安倍の朝臣蟲麿が

家に宴せる歌一首

一一一 同じき月十一日、活道岡に登り、一株の松の下に集

ひて飲せる歌二首 大伴の宿禰家持、市原の王

一二四 寧樂の京師の荒墟を傷み惜しみて作れる歌三首 作

主未だ詳ならず

一〇五 美濃國多藝行宮大伴宿禰東人作歌一首

一〇六 大伴宿禰家持作歌一首

一〇七 不破行宮大伴宿禰家持作歌一首

一〇八 十五年癸未秋八月内舍人大伴宿禰家持

讀久邇京師作歌一首

一〇九 高丘連河内歌二首

一一〇 安積親王宴左少辨藤原朝臣八束家之日

内舍人大伴宿禰家持作歌一首

一一一 十六年甲申春正月諸卿大夫宴安倍朝臣

蟲麿家歌一首

一二四 同月十一日登活道岡集一株松下飲歌二

首 大伴宿禰家持市原王

一二四 傷惜寧樂京師荒墟作歌三首 作主未詳

一〇七 寧樂の故郷を悲しびて作れる歌一首短歌并せたり

一〇八 久邇の新京を讀むる歌二首短歌并せたり

一〇九 春の日、三香原みかのばらの荒墟を悲しび傷みて作れる歌一首短歌并せたり

短歌并せたり

一一〇 難波の宮にて作れる歌一首短歌并せたり

一一一 敏馬みぬめの浦を過ぎし時作れる歌一首短歌并せたり

卷 第 七

雜 歌

三

一〇七 悲寧樂故郷作歌一首并短歌

一〇八 讀久邇新京歌二首并短歌

一〇九 春日悲傷三香原荒墟作歌一首并短歌

一一〇 難波宮作歌一首并短歌

一一一 過敏馬浦時作歌一首并短歌

卷 第 七

雜 歌

三

一〇六 天を詠める一首

一〇七 月を詠める十八首

一〇八 雲を詠める三首

一〇九 雨を詠める二首

一〇一〇 山を詠める七首

一〇一一 岳むかを詠める一首

一〇六 詠天一首

一〇七 詠月十八首

一〇八 詠雲三首

一〇九 詠雨二首

一〇一〇 詠山七首

一〇一一 詠岳一首

100	河を詠める十六首	100	詠河十六首
116	露を詠める一首	116	詠露一首
117	花を詠める一首	117	詠花一首
118	葉を詠める二首	118	詠葉二首
119	蘿 こけ を詠める一首	119	詠蘿一首
120	草を詠める一首	120	詠草一首
121	鳥を詠める三首	121	詠鳥三首
122	故郷 しゆ を思ふ二首	122	思故郷二首
123	井を詠める二首	123	詠井二首
124	倭 やまとこと 琴を詠める一首	124	詠倭琴一首
125	芳野にして作れる歌五首	125	芳野作歌五首
126	山背にして作れる歌五首	126	山背作歌五首
127	攝津にして作れる歌二十一首	127	攝津作歌二十一首
128	羈旅にして作れる歌九十首	128	羈旅作歌九十首
129	問答の歌四首	129	問答歌四首